

## バルザックの『老嬢』における母性とエロティズム

中村 加津

『老嬢』*La Vieille Fille*の末尾は「 En atteignant à l'âge de soixante ans, [...] elle (Mlle Cormon) a dit [...] qu'elle ne supportait pas l'idée de mourir fille (936). » という文で締めくくられている。この *filles* の語をどのように解釈すべきか。結婚したのに娘のままだったというのは、夫が政治的、経済的な活動ばかりに熱心で、妻を無視したままだったという意味なのか、子供を産めなかったことを指しているのか、それとも、この作品の随所に見られるエロティックな語り口から考えて、夫婦の間に性的交渉がなかったことを言っているのか、定かではない。

『老嬢』は発表された1836年当時、非常に評判が悪く、次のように批評されたようである。

Une vieille fille habite Alerdon ; elle est riche, elle a trois galants, elle s'en épouse un, et elle éprouve des déceptions : voilà toute l'histoire. Sur ce frêle sujet, l'auteur a écrit un volume de portrait érotiques et de détails graveleux<sup>1)</sup>.

この作品にエロティックな面があることは、誰にも否定できない。Garnier版の編者である Pierre-Georges Castex はこの作品を「 un nouveaux conte drolatique<sup>2)</sup> 」と名付けた。Maurice Ménardは*Balzac et le Comique*<sup>3)</sup>の中で、『人間喜劇』の持っている幾つかの要素を表現する役目を *drolatique* と *comique* の両語が荷なっていると述べ、*drolatique* にはエロティックな用法が頻繁に見られるとする。確かに、カステックスの解釈はこの作品のなかのエロティックな要素を重視するものである。そこにはすべての人間の心の底にフロイトの教えるリビドーの存在を認める精神分析学の方法の存在が感じられる。それに対して、Pléiade1976年版の解説の中で Nicole Mozet は異論を唱え、財産の継承についての義務感こそが、コルモン嬢を結婚へと駆り立てたのであって、(上の文中に引用した) *filles* という語は「妻」よりも、「母」の対義語であるとする(797-8)。また、モゼ女史は、*La Ville de Province dans l'Œuvre de Balzac*の中で、コルモン嬢を、アランソンの町の母のよう

本文中バルザックの作品については、Balzac, *La Comédie humaine*, Bibliothèque de la Pléiade, 1976 を使用した。

本文中の引用文のあとの( )中のローマ数字はテキストの巻数、三桁のアラビア数字は頁数を表す。但し第 巻からの引用はローマ数字を省略して頁数だけをアラビア数字で記した。

1) Nicole Mozet, *La Ville de Province dans l'Œuvre de Balzac*, Genève, Slatkine Reprints, 1998, Réimpression de l'édition de Paris, 1982, p.169. に引用されているものを借用した。

2) Pierre-Georges Castex, Introduction à *La Vieille Fille*, Classique Garnier, 1957, p.VII.

3) Maurice Ménard, *Balzac et le Comique dans « la Comédie humaine »* PUF, 1983, pp.87-89.

な存在と位置づけ、彼女を中心として動いているこの町は、王のいない宮廷のような女性的、母性的な空間であって決断力がなく、父となるはずの Du Bousquier には、バルザックが父性に求める節度と均整をもって恩恵を施す力がない。彼の粗野な専制主義により町全体が息の根をとめられたと説く。父性と母性の果たす政治的な役割という面からこの作品の主人公たちを解釈しているのである<sup>4)</sup>。しかしモゼ女史もエロティシズムの存在を否定しているわけではない。1984年の *l'Année balzacienne* に掲載された *Alençon, ville-corps*<sup>5)</sup> と題する論文にそれが見られる。ここでは、アランソンの町を母体に例え、この作品の表面に現われているのは誰の目からもよく見える、コルモン嬢を中心とする町であるが、隠されたもう一つの町、洗濯屋のラルドの家を中心とするほとんど描かれていない町が存在するとし、洗濯屋をこの隠れた町の *bouche-sexe*<sup>6)</sup> と名付け、ここを出発点としてシュザンヌがコルモン嬢の *tentacules* とも見える道を歩きながら、町中にエロティシズムをまき散らしていくと論じている。つまり、コルモン嬢ではなく他の人物の、更に言えばこの町全体のエロティシズムを問題としている。

本論ではまず、『老嬢』のどこにエロティシズムがあるのかをはっきりさせたい。19世紀初頭にフランス語で書かれたこのニュアンスに満ちた事柄を、現代の日本語を使って正確に読み取る際には、かなりの慎重さが必要と感ぜられるからである。次に、このエロティシズムと母性との関連を考え、さらにそれらが、この作品の基調をなす喜劇性にどう関わっているかを明らかにして、『人間喜劇』の中で『老嬢』が占めるべき位置を示したい。

この作品の主題は1816年、地方都市アランソンにおいて、人々の長年の重大関心事であったコルモン嬢の結婚がいよいよ決まる経緯である。結婚を話題にするとき、母となることか、性的交渉かのどちらを強く意識しているかが問題となるのは避けがたい。「性」は、文明化が進むにつれて隠蔽されるべきものとされてきた。まず禁制がありそれを犯すという意識があるところにエロティシズムが生まれる。これは、はっきりとは口にされず密かに言葉の裏に隠されるので、いきおい表現は含みの多いものとなる。この作品にはそのような部分が多い。特にヒロインの結婚願望についての描写に見られる。たとえば *virginité* についてである。 *femme* となるべくあらゆる努力を試みたのに *fille* のままで40歳を迎えてあせっているコルモン嬢は宗教に救いを求めるのだが、この時バルザックは *religion* の語に、*« cette grande consolatrice des virginités bien gardées (858) »* と説明を加えている。この *virginités* を「処女」と訳すと、現代の日本人の感覚からすれば、その前の *fille* は「未婚の女性」というよりも「生娘」という言葉が相応しいことになり、それでは原語から離れすぎた解釈になるのではないだろうか。同様な例が他にもある。コルモン嬢は年老いた伯父と二人暮らしをしているが、伯父は厳格なカトリック保守派の神父であった。姪に対して父のような愛情を抱いているのだが、

4) N. Mozet, *op. cit.*, *La Ville...* pp.161-177.

5) N. Mozet, « Alençon, ville-corps » in *l'Année balzacienne*, 1984, pp.297-305.

6) *Ibid.*, p.304.

ただ彼女の「les agitations de la Chair (861)」を理解しない。というのも彼は「l'état de virginité était autant au-dessus de l'état de mariage que l'Ange était au-dessus de l'Homme」とする主義の信奉者である。キリスト教徒が「結婚」を「処女性」の対局に位置づけるのは当然であるが、それに合わせてこの文章の中の les agitations de la Chair を「肉欲からのいらだち」と解釈すると、コルモン嬢の結婚願望は性的なものとなる。それを認めれば、次の nature も性的な色合いを帯びて、「彼女は毎夜一人になると」« elle songeait à sa jeunesse perdue, à sa fraîcheur fanée, aux vœux de la nature trompée (860) »の中の vœux の訳語として「欲望」が浮かんでくるが、「la nature l'avait destinée à tous les plaisirs, à tous les bonheurs, à toutes les fatigues de la maternité (856)」という文を読むとそれは適訳ではないようにも思えてくる。また、次の désir はどのような日本語に対応するだろうか。1815年に彼女は42歳となり« Son désir acquit alors une intensité qui avoisina la monomanie [...] (859). »このdésirを「欲望」とすればかなり性的に感じられる。しかしこの直後に次のように書かれている。「et ce que, dans sa céleste ignorance, elle désirait par-dessus tout, c'était des enfants.」

以上のような語彙の解釈に伴う問題への対応の参考として次の例をあげたい。結婚以前には« Il était authentique dans Alençon que le sang tourmentait Mlle Cormon (858) »とある。そして結婚直後の二年間は、デュ・ブスキエ夫人は満足なようすであったことを記したあと、「Le sang ne la tourmentait plus (925) »とある。結婚後の文章は間接話法になっていないが、前のものと全く同じ表現なのでこれもアランソンの人々の噂であることは明らかである。コルモン嬢が自ら言ったのでも、作者が彼女をそのように描写しているのでもない。このように、作者がヒロイン自身の言葉や思いや気持ちを書いているのか、周囲の人々の噂を書き写しているのかを考えながら読む必要を感じさせる部分に少なからず出会う。訳語の選び方次第で、日本語は表意文字であるだけにはっきりとした印象を与え過ぎて、フランス語の含みの多い表現に訳者の解釈が付き、読者の解釈の自由を奪う。

ここで、この時代のコルモン嬢のような家柄の真面目な女性が、「性」をどのように認識していたかを推測してみたい<sup>7)</sup>。

カトリック、プロテスタントを問わず、伝統的西欧キリスト教世界では、永遠の救済を約束する魂の命のみが高貴なものとされる。しかし、未来の世界を多くの人々に満たす為には性的交渉と生殖は無視できない。性的交渉は生殖が約束されてはじめて正当化される。肉体のあらゆる営みは悪徳によって汚れており、子を宿すことがその唯一の償いなのであった。さらに、貴族社会であれ、ブルジョア社会であれ、その秩序を守る目的で女性を誘惑から守るため、厳格な規律が必要とされる。女性は結婚するか、さもなければ修道院に入る以外に道はない。フ

7) この部分は、M. Laget, *Naissance*, Seuil, 1982, 藤本、佐藤訳、『出産の社会史』、勁草書房、1994; N. Elias, *Über den Prozess der Zivilisation*, Francke, 1969, 赤井他訳、『文明化の過程』上巻、法政大学出版局、1997; Luppe, *Les Jeunes Françaises au XVIIIe Siècle*, La Revue française, 1932等を参照した。

ランスでは18世紀の自由思想とともに宗教からの性の解放の動きが顕著になったが、19世紀のブルジョア社会は性のタブーを強めた。母親となるべく運命づけられた女性は、快楽よりも生命の意義を強く感じ、罪の意識を深く持つようになる。生殖や出産に関する事柄は、世間の目から隠蔽されるべきこととされ、そのため文明化が進むにつれて、性問題に直面しての羞恥心、不快感は増大する。

コルモン嬢は非常に真面目な女性である。『人間喜劇』のヒロインの中で *La Maison du Chat-qui-pelote* の二人の娘を例にとるならば、画家に誘惑される美しい Augustine よりも、姉の Virginie に似て、感情よりはむしろ義務に従うタイプである。どのような理由のためなのか書かれていないが、コルモン嬢には結婚の世話をしてくれる両親がいない。莫大な財産の管理を安心して任せられ、これを継承させる子孫を与えてくれる男性、しかも彼女自身を人間として認めてくれる男性をたった一人で見つけるのは大変な仕事である。篤い信仰心をもつ彼女の結婚への義務感が強くなればなるほど、異性への警戒心も強くなるのは、このような背景を考えれば当然のことである。 *Le Curé de Village* の Veronique が罪を犯すのは、たまたま父にねだって買ってもらった *Paul et Virginie* を読んだことに起因する (IX-654)。本を読まないコルモン嬢にはそのような危険はなかった。想像力が刺激されたこともなく、性体験もない女性が性的不満を意識することはありえないだろう。

40歳になって一層あせるようになるのは、ある程度の医学的知識が一般的なものになっていたためかもしれない。17世紀以降、博物学者や医者は受精のメカニズムを発見し、叙述するようになった。17世紀末にはオランダ人たちは顕微鏡を用いた観察によって、卵子と精子を発見する。18世紀末には産科学が大進歩をなしとげたことにより、それまで神秘に包まれていた出産に関する知識は広がり、女性たちは自らの生理を正確に意識するようになる。とはいえ、出産に伴う母子とも危険は、現代と比較してまだ計り知れないほど大きかったことは事実である。 *Pierrette* の中で、30歳の Mille Habert は le colonel baron Gouraud との結婚を意識しはじめた42歳の Sylvie Rogron にそれを諦めさせるため、医者が、未婚の40歳を過ぎた女性が初めて結婚して子供を生むのには非常な危険を伴うと言うのを、化粧室に隠れた Sylvie に盗み聞きさせる場面を設定する ( -101-2)。 *Pierrette* にはこの他にも同様のことを別の人物が言っている場面も何回かある。医学教育の場にはじめて産科学の講座が始まったのは1806年である<sup>8)</sup>。しかし、このような学問的な進歩の恩恵を受けるのは、出産、育児に関する面に限られ、性的交渉の具体的な知識はエロティックなこととして、真面目な女性の耳には入らなかったと想像できる。『老嬢』には、馬の交尾を話題にする場面など、コルモン嬢のこのような面での無知が人々に笑われる場合が多い。彼女が結婚したのに子供ができない原因に探りを入れようとする chevalier de Valois にそそのかされて、彼女の友人である貴族の夫人たちは、彼女にうまく夫婦生活の詳細をしゃべらせ、夫の性的

8) I. Knibienhler, C. Fouquet, *Histoire des Mères*, Montalba, 1977, 中嶋、宮本ほか訳『母親の社会史』筑摩書房、1994、197ページ。

不能のため子供が生まれる可能性のないことを彼女に教えさえする。あとでこれが皆の笑い種となるのは勿論である。

『老嬢』が現行の作品になるまでの、題名の異なる二つの試作、*La Fleur des Pois* および *Les Jeunes Gens* と、さらに、*La Vieille Fille (manuscrit original)* と名付けられている草稿が残されている。また、この作品には発表後の加筆、修正が多い。これらの資料を見比べると、書換えや加筆が増すにつれて、コルモン嬢の性的欲求をにおわせるような表現は穏やかなものにとってかわり、彼女の無邪気さを表わす部分が増加している。彼女の無知と無垢をより明確にする必要を作者は感じたようである。

結婚願望があるという事実は周囲の人々の性的な興味をそそる。彼らのそのような好奇心の描写によって作品がエロティックな印象を与えるのである。アランソンの人々がコルモン嬢をどのように性的存在と意識しているかを見直そう。コルモン嬢の外見は、誰の目にも魅力的な美しい洗濯女シュザンヌとは対照的なものとして描かれる。彼女との結婚を期待している二人の老人も決して彼女を性の対象とは見ていない。ただひとり、彼女にセックス・アピールを感じている人物がいる。アタナーズである。

Cette grasse personne offrait à un jeune homme perdu de désirs, comme Athanase, la nature d'attraits qui devait le séduire. Les jeunes imaginations essentiellement avides et courageuses, aiment à s'étendre sur ces belles nappes vives (858).

人々から離れ、密かに彼女を思っているこの青年以外の人々にとっては、コルモン嬢は滑稽な存在である。バルザックはそのように描いている。この作品における喜劇性の中心人物はコルモン嬢である。一例として、デュ・ブスキエのプロポーズの部分を挙げてみよう。ガラントリーとは無縁の二人がまったく月並みの言葉で愛を告白しあう。うっとりとしながら交わす二人の会話を写し取っているバルザックは実に意地悪い。「Du Bousquier saisit cette bonne grosse main pleine d'écus et la baisa saintement. [...] Elle lui rendit sa grosse main rouge que rebaisa du Bousquier (908).」この瞬間にドアが開いてシュヴァリエが姿を現わす。彼はデュ・ブスキエの髪がずれて、禿げ頭が露出しているのを指摘する。この禿げ頭は作品の冒頭でシュザンヌにも見られている。デュ・ブスキエはコルモン嬢にも劣らず滑稽な人物である。人に笑われるのは、弱みを持っていること、へまをすること、そして怖がられたり同情されたりするところのない場合である。結婚するまでの彼は決して恐い人物ではない。

この作品には、*Le Cousin Pons* に描かれているような悲惨さも、*La Cousine Bette* にあるような壮絶さも無い。笑いが凍りつくことはない。柏木隆雄氏は *La Trilogie des Célibataires d'Honoré de Balzac* において、『老嬢』に登場する二人の独身老人は、独身の悲惨さを全く感じさせず、むしろ独身生活を楽しんでいるかのよ

うで、独身状態を利用することさえ考えていると指摘している<sup>9)</sup>。コルモン嬢も人々の笑いの対象になっているとはいえ、誰からも憎まれていない。

Danielle Depuis の、*Derision du Pathétique et Pathétique de la Derision* は、バルザックの特徴である、悲劇のなかの喜劇性、喜劇の中の悲劇性の持つ現代性を指摘する論文である。その中で、たとえば *Le Curé de Tours* では、愚かなピロトーはその徹底的な愚かさのために、偉大さ崇高ささえ感じさせるが、『老嬢』では、それほどすんなりと喜劇から悲劇へと移行するのではなく、バルザック特有の « comique grinçant, plus terrible encore que le franc pathétique » へと行き着くと述べているが、この「ぎくしゃくした喜劇性」の例としてはコルモン嬢とデュ・ブスキエとの結婚によって落胆したシュヴァリエの描写が引用されている<sup>10)</sup> だけである。

『老嬢』の中で、天才を隠し持ちながら理解もされず自殺したアタナーズだけが、笑いの対象となり得ない。彼は自身の内部の天才を感じている。それを産み出させて栄光を獲得させてくれるのは、コルモン嬢だと彼は思い込む。母のグランソン夫人にはその資格がない。この母親は、作品中唯一、現実に母親であるのだが、彼女の母性愛は純粹ではない。La Société de Maternité という慈善団体での彼女の仕事が、実は全く利己的な動機で行われることがそれをはっきりと示している。コルモン嬢と息子との結婚を願っているためと称して、彼女自身が実はコルモン嬢の財産をねらっていると読み取れる場面が多い。その証拠に、息子が遠方で死刑に処せられたのと同時刻に死ぬ、*Le Requisitionnaire* に描かれた母のようではなく、グランソン夫人は息子が水嵩の増した La Sarthe に音もなく身を沈めている時刻に、彼の置き手紙を読んでも胸騒ぎすら感じない。« [...] et elle se coucha tranquille (918) »。息子は母親の母性愛が自分を破滅させることを感じている。« tu me perdras... (917) » というのが、彼が母に向かって発した最後の言葉であった。

失神したコルモン嬢を頑丈な腕にかかえてベッドに運んだデュ・ブスキエが、露にされた彼女の胴着の上に水をかけた時の様を、バルザックは « comme une inondation de la Loire (904) » と表現しているが、アタナーズはサルト河ではなく、このロワール河に身を投げるべきであったのだ。そのようにして、コルモン嬢はこの青年の天才の生みの母となることが出来たはずである。ところが彼女には全く洞察力がなかった。

[...] Mlle Cormon n'y (dans les regards d'Athanase) voyait rien, elle ne reconnaissait pas dans les tremblements de sa parole la force d'un sentiment qui n'osait se produire (863).

アタナーズの不幸はこの作品全体の喜劇的な雰囲気にはあまりそぐわない。多

9 ) Takao Kashiwagi, *La Trilogie des Celibataires d'Honoré de Balzac*, Nizet, 1983, pp.71-72.

10 ) Danielle Depuis, « Derision du Pathétique et Pathétique de la Derision » in *l'Année balzacienne*, 1999 (I), pp.229-256.

くの批評家から *invraisemblable* と評されている<sup>11)</sup>。一つ目の試作ではコルモン嬢は若い男性と結婚している。二つ目の試作においても相手としては若者しか考えていない。モゼ女史に « *un héros marginal*<sup>12)</sup> » と呼ばれるアタナーズの存在は試作の名残である。試作には喜劇的雰囲気はない。決定稿で、シュザンヌが金銭をだまし取るための偽りの父性の対象として老人を選んだことにより、一挙に作品に喜劇性が加わった。真面目なコルモン嬢の母性への願望は、彼女のそそっかしさと伯父の迂闊さが重なって起こった奇想天外な事件をきっかけに不能者と結婚せざるを得なくなるという、気の毒ではあっても笑いを誘わずにはおかない経緯のために、消滅してしまった。彼女の結婚が引き金となったアタナーズの死とともに、コルモン嬢の母性とエロスとの結びつきはなくなった。彼女はもはやエロティックに描かれることはなく、シュヴァリエのガラントリーもなくなった。この結婚を契機に、アランソンの町では貴族の勢力が弱まり、主導権をブルジョアに譲ることになる。これまで政治的な対立、旧体制と自由主義との対立はコルモン嬢の結婚をめぐるものであった。結婚問題の勝敗はそのまま政治的勝敗を意味する。そのため町の雰囲気も一変する。コルモン嬢の結婚ではなく、政治が人々の関心の的となる。また、エロティシズムとともに母性も姿を消す結果となった。そこまでを描くのがこの喜劇的な作品の役割である。それがこの町をどのように変えていくかの詳細は、別の角度から *Le Cabinet des Antiques* の中で描写されている。

『人間喜劇』の中には老嬢が登場する作品は多い。そのなかで、とりわけこの作品が *La Vieille Fille* と名付けられたのは何故だろう。彼女の生涯には Eugénie Grandet の場合のような深刻さもなく、その性格は Sophie Gamard、ましてや Sylvie Rogron のように残酷でもない。ただ、とりわけ世間知らずである。バルザックが彼女を *Vieille fille* と呼ぶとき、そこには「いくつになってもお嬢さんのままの人」とでも訳せるニュアンスがあるのではないか。

メナールは、『人間喜劇』中の作品における *rire* という語の使用頻度と用法を調べているが、『老嬢』においては個人の笑いよりは集団の笑いが圧倒的に多いという<sup>13)</sup>。『人間喜劇』には、コルモン嬢ほど周囲の人々に、また、読者にも笑いの種を提供した女性は他にあるだろうか。『老嬢』は『人間喜劇』の世界から、やはみ出した位置に存在する作品と言える。それは、人物の命名にも現われている。シュヴァリエもデュ・ブスキエも名は付けられていない。シュヴァリエは、フランスのあちこちの地方によく見かける、背の高い、痩せた、そして財産のない老紳士 *chevalier de Valois* の一人として紹介される。デュ・ブスキエの名についてはさらに問題がある。『骨董室』は『人間喜劇』の中では *Les Rivalités* という総題のもとに『老嬢』と並べて収められていて、その後日譚であると誰もが認めている。ところがそこで活躍するデュ・ブスキエであるはずの男の名が *du Croisier* となっている。この、人物再登場法に逆行する命名について、寺田透はかなりこだわっ

11) N. Mozet, *op.cit.*, *La ville...* p.174.

12) *Ibid.*, p.176.

13) Ménard, *op. cit.*, p.173.

て考察している<sup>14)</sup>。コルモン嬢も『骨董室』では勿論デュ・クロワジエ夫人となっている。彼女は『骨董室』では出番は少なく、他の『人間喜劇』の小説中には登場しない。また、『老嬢』の中でも、どんな両親に、どのように育てられたのか、読者には知らされない。二人の老人と一人の老嬢は、個人としてよりはそれぞれの典型としての役割のみを背負わされているかのようである。 *La Femme de trente ans* に属する作品群のヒロインの名が一定しないことが思い出される。『人間喜劇』は未完成である。これら『人間喜劇』の登場人物系統樹に結び付けることを作者が拒んでいるかのような作品は、バルザックの頭脳とともに葬られた更に新しい構想の存在を暗示しているとも考えられよう。

(F. 1958、関西外国語大学教授)

---

14) 寺田透『人間喜劇の老嬢たち』岩波新書、1984、2-34ページ。